

信濃町メディアセンターの社会貢献

-すべての人に健康と福祉を-

えんどう いずみ
遠藤 泉

(信濃町メディアセンター)

にしざき あさこ
西崎亜砂子

(三田メディアセンター)

さやま のの
佐山 のの

(信濃町メディアセンター)

1 はじめに

信濃町メディアセンター（以下「メディアセンター」とする）は大学図書館であるとともに、医学及び関連分野に特化した専門図書館でもある。サービス対象は医学部生や医療従事者であり、日々のサポートを通し、間接的であっても医学の発展による社会貢献につなげることがメディアセンターの使命である。したがって総務、テクニカルサービス、パブリックサービス、健康情報サービスといった業務全体が結果的に「持続可能な開発目標」(SDGs)の目標3「すべての人に健康と福祉を」につながるといえるが、ここでは特に健康情報サービス（健康情報ひろば、KOMPAS¹⁾）とレファレンスサービス（代行検索）を紹介する。

2 健康情報ひろば

(1) 開設の経緯

慶應義塾大学病院（以下「病院」とする）で患者図書室の役割を担う健康情報ひろば（以下「ひろば」とする）は、2009年1月、薬局待合スペースの一隅にオープンした。当時の我が国では、インフォームドコンセント（十分な説明と合意）を推進するための患者図書室の開設が相次いだ。メディアセンターが事務局を務め開設した当時のひろばのミッションは、インフォームドコンセントに役立つ情報提供（患者さんの権利の尊重）、病院の先進的医療を一般市民にわかりやすく紹介する（広報活動）、薬の待ち時間の有効活用（外来患者サービスの向上）であった。

(2) サービス内容

ひろばは、度重なる移転と新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」とする）によるサービス休止を経て、現在は病院の2号館2階にあり、7名のボランティアスタッフが日替わりで患者さん対応を行っている。ボランティアスタッフはひろばのWebサイト²⁾や新宿区の社会福祉協議会を通して随時募集している。



図1 健康情報ひろば

ひろばの主なサービスは、患者さんやその家族に対して、慶應義塾大学病院医療・健康情報サイトKOMPASや図書、雑誌、各種パンフレットによる健康情報を提供することである。図書は現在およそ600冊、雑誌は4タイトル、パンフレットは約170種を用意している。開室時間は10時から15時で、閉室後は図書や雑誌の書棚はシャッターを閉めるため利用不可となるが、座席やパンフレットは終日利用できる。

図書の選定は年に2～3回をめどにメディアセン

ターのスタッフがいき、新版は旧版と入れ替え、定期的にコレクションを見直している。患者さんの多くは他院からの紹介により通院しており、あまり一般的な内容では満足されないと考えられているため³⁾、内容が簡単すぎるものは選んでいない。EBM (Evidence-Based Medicine: 根拠に基づく医療) にも配慮し、個人の主観的な体験をつづった闘病記は置かず、患者さんや家族向けの診療ガイドラインを優先的に購入している。

パンフレットは、製薬会社が患者さん向けに無償で配布しているもので、特定の薬剤の宣伝目的でないものを揃えて、自由に持ち帰り可としている。病院内のがん相談支援センターとも連携し、国立がん研究センター、静岡がんセンター、NPO法人キャンサーネットジャパンが発行する各種がん冊子も提供している。これらの冊子の多くはWeb上でも公開されているが、自宅にPCのない方、またPCの操作に不慣れな方にとって、冊子体を提供できるひろばの果たす役割は大きい。

(3) 他部署との連携

病院内の他部署との連携も増えている。がん相談支援センターをはじめ、病院総務課（病院広報誌『すゝめ』⁴⁾の設置）や、臨床研究推進センター（オプトアウト⁵⁾や患者申出療養⁶⁾の窓口への案内）、患者総合相談室（小冊子『知って得するシリーズ』の設置）、看護部（SKiP KEIO: Supporting Kids of Parents with Cancer: がんの親を持つ子どもサポートチームの広報）とのつながりもできた。

またコロナ禍によりひろばは2020年3月末から2021年12月まで閉室し、2022年1月よりサービスを再開したが、これも医事統括室や感染制御部との調整を経たものである。

(4) 利用統計

現在のひろばの開室時間中の利用者数は1日平均20名前後で、サービス再開後、その数は徐々に伸びている。また患者さんからの質問は、2022年度の全932件中、多い順に「病気・検査・薬・食事・栄養についての質問」413件（44%）、「院内案内」216件（23%）、「ひろばの使い方・資料の探し方」175件（19%）であった。一方で統計上見えにくい「傾聴」も大切なサポートの一つである。患者さんの中には、

医師や看護師には話せない健康上の悩みを抱える方も多く、ボランティアスタッフはそのような繊細な内容にも心を寄せ、患者さんと信頼関係を築くことのできるプロフェッショナルである。

(5) これからの課題

コロナ前、ひろばが1号館の救急外来前にあったところは敷地面積が非常に広く（68m²）、1日平均40名前後の利用があった。現在の敷地面積は38.99m²とかなり縮小され、それまで設置していたソファも撤去したことから、居場所としての利用目的というよりも、必要な情報を探すために来室するケースがほとんどなのかもしれない。限られたスペースの有効活用と利用促進が現在のひろばの課題であり、外来にて患者さんにひろばを紹介してもらうべく、病院の各診療科にひろばの存在をアピールする必要がある。

3 KOMPAS

(1) 誕生の経緯

KOMPASは病院の医師・医療専門家が病気や検査、薬などの様々なトピックを患者さん向けに解説した、病院オリジナルのWebコンテンツである。2009年1月のひろばの開設とともに、ひろば設置のPCのみで閲覧できるコンテンツとして提供をはじめた。

編集委員および運営委員を教員に依頼し、事務局をメディアセンター内に置いている。当初よりインターネット上での一般公開を見据えて制作を進め、2010年3月に570件ほどの記事³⁾で公開を果たした⁷⁾。病院の片隅からはじまったKOMPASは、現在、院内・院外を問わず広く利用される医療・健康情報サイトとなっている。



図2 KOMPASトップ画面

(2) サイトの構成

6種類の記事で構成され、2023年6月末時点で合計870件の記事を公開している（括弧内の数字は種類別件数である）。

「病気を知る」（477件）「検査を知る」（139件）の記事が大半を占めており、公開にあたり病院の患者さんの代表的な病気をカバーできるように選択された³⁾。「くすりを知る」（18件）は薬剤部、「栄養と食事」（22件）は食養管理室が執筆を担当している。「あたらしい医療（当初の名称は「最新の医療紹介」）」（100件）は2009年4月に掲載を開始した、病院各診療科の診療と治療の最新動向についてわかりやすく紹介した記事である。そして「慶應発サイエンス」（114件）は、本学医学部の研究者による最先端の医学研究を解説する記事として2012年9月に掲載を開始した。

(3) アクセス数統計

KOMPASへのアクセス数統計を見ると、インターネットに公開した2010年3月から12月の間は月の平均アクセス数が約9万回だったのに対して、2011年は約19万回、2012年は約38万回と数値を伸ばし、2022年は約62万回となっている。インターネットにアクセスできる人なら誰でも利用できる医療・健康情報源として着実に認知されてきたといえる。

(4) 記事掲載までの流れ

KOMPASでは原則として毎月、「あたらしい医療」と「慶應発サイエンス」の新規記事を1本ずつ掲載している。執筆者の選定から記事掲載までの大まかな流れは以下の通りである。

- a 隔月開催のKOMPAS編集委員会で執筆者を選定
- b 執筆打診
- c 提出された原稿を校正
- d（必要に応じ）イラストレーターにイラスト制作を依頼
- e Webサイト制作業者に入稿
- f テストサイトで内容やレイアウトを確認
- g 記事公開、各種広報（メーリングリスト、教職員イントラ、Twitter）

執筆候補者は編集委員から提案されるほか、診療科・部門側から寄稿の申し出を受けるケースもあり、KOMPASが最新の治療法や研究成果をアピールする場として期待されていることが伺える。

(5) 記事の改訂

時間の経過とともに記事の内容が現状と合わなくなる場合も多いため、定期的に改訂を行い最新の掲載情報を保つことがKOMPAS運営上の重要な課題である。診療科・部門から改訂の申し出があった際に随時対応しているほか、事務局からも、最終更新日から一定年数が経った記事についての見直しを対象の診療科・部門に依頼している。

一方で、記事が全体で870件と非常に多く、改訂にはかなりの時間を要するため、今後も継続して実施できるよう長期的な計画を立てている。

(6) 画像利用申請への対応

KOMPASに掲載するイラストの制作は、医療専門のイラストレーターに依頼しており、外部からも非常に好評で転載の希望が寄せられることも多い。その場合には画像利用申請書を提出してもらい、対象記事の執筆を担当した診療科・部門のKOMPAS運営委員に確認を取ったうえで利用可否を回答している。なお利用にあたっては、改変不可、クレジットの明記などの条件を遵守してもらっている。

過去に申請を受け付けた利用目的には、患者向けの説明文書や市民公開講座の資料への転載、テレビ番組内での使用などがある。このようにKOMPASのイラストを正しく利用してもらうことで、医療情報をよりわかりやすい形で社会に発信することに貢献している。

4 代行検索サービス

(1) 診療ガイドライン

診療ガイドライン（以下「診療GLとする」）は、「健康に関する重要な課題について、医療利用者と提供者の意思決定を支援するために、システムティック・レビューによりエビデンス総体を評価し、益と害のバランスを勘案して、最適と考えられる推奨を提示する文書」と定義され⁸⁾、例えばある疾患の検査や治療について、複数の選択肢がある場面で、科学的な研究結果などをもとにそれぞれを比較した上

で、推奨される方法を示して患者さんと医療者の選択を助けるものである。

診療GLはシステマティック・レビュー（以下「SR」とする）に基づき作成される。SRとは、一般的に「系統的・網羅的な文献調査に基づく評価・分析」と説明される。ライフサイエンス、特に医学分野において浸透している研究方法論で、系統的な方法論上のルールに従いベストエビデンスを特定するためのものである⁹⁾。メディアセンターでは、教員からの要望により2006年頃から診療GL作成のための文献検索に対応するようになった。日本医学図書館協会（以下「JMLA」とする）でも2008年から診療GLワーキンググループ（以下「WG」とする）を設置し、メディアセンターは2012年度からこのWGに参加している。具体的な作業内容は、診療GLの担当者から提出される臨床疑問（クリニカルクエスチョン：CQ）に基づきPubMed（MEDLINE）や医中誌、Cochrane Library等のデータベース（以下「DB」とする）を検索し、得られた文献情報を担当者に提供するというものである。

このようにメディアセンターでは教員経由、JMLA経由での診療GL作成のための文献検索依頼を受け付けている。ここ数年の受付件数は2021年度3件、2022年度3件、2023年度8月現在で1件である。

治療方針の判断材料となる診療GLのための文献検索は、社会貢献度の高い業務である一方、各種DBの操作方法や特色を熟知した専門的な能力が求められるため、JMLAは各種研修を用意している。基本的にはその研修を受講しないと検索作業に携われないが、本学は総合大学のため、人事異動で技能を習得する前に担当を外れる可能性もあり、計画的な研修スケジュールの構築やノウハウの共有でスタッフの専門性を維持しなければならない点が課題である。

(2) 医療技術評価

2019年4月、医薬品や医療機器等の製品価格に経済的視点を入れる費用対効果評価制度が開始され、国立保健医療科学院からの委託により、本学の健康マネジメント研究科にて、医療技術評価（Health Technology Assessment：以下「HTA」とする）のための人材育成プログラムが始まった¹⁰⁾。2020年4月には、先行する聖路加国際大学、立命館大学に次いで国内で3機関目となる「医薬品及び医療機器

の費用対効果評価」の公的分析実施機関に本学が選定され、公的分析業務（2020～2026年度）を行っている。

費用対効果評価のおおまかな流れは、分析枠組を決定する「分析前協議」、製薬会社等の企業による「企業分析」、公的分析機関による「公的分析」の3段階に分けられる¹¹⁾。メディアセンターではこのうち「公的分析」のSRのサポートを担い、各種DBの文献検索を行う。

メディアセンターが初めて教員からHTAの代行検索の相談を受けたのは2021年の6月であった。使用するDBはPubMed、医中誌、Cochrane Library（CENTRAL）、EMBASEである。メディアセンターが契約していないEMBASEは、研究室で契約しているIDをメディアセンター用に増やし使用した。企業分析が完了し、公的分析のプロトコル（SRの手順書・計画書）が作成され、2022年3月から作業に着手した。手探りでの作業のため、オンラインにて複数回にわたる打ち合わせを教員と行い、確認を経て5月末に検索式が確定した。文献情報は無料のSRツールRayyan¹²⁾で取り込み可能なRIS形式で納品した。

HTAの代行検索の年間受付件数は2021年度1件（公的分析）、2022年度3件（公的分析1件、研究論文2件）、2023年度8月までに1件（研究論文）を計上している。1件あたりの依頼には納品まで1～3か月程度かかる場合もあり、件数は少ないが、健康マネジメント研究科にて人材育成を行っていることから、公的分析以外でも、大学院生の学位論文や教員の研究論文作成のための検索相談の機会が増えている。診療GL作成のための文献検索など、SRのサポート自体は以前から行っているが、新たな切り口としてHTAが加わり、相談窓口としてメディアセンターの果たすべき役割が確立されつつある。

5 医学図書館としての社会貢献

ひろばでは患者さん対応の中で、病院や医師への感謝の言葉をいただくことも多く、改めて病院の職員としての立ち位置を意識させられる。KOMPASでは外部からの画像利用申請への対応により、慶應の研究や医療が形を変え社会全体にインパクトを与えていることを実感できる。

診療GLやHTAをはじめとしたSRの代行検索サー

ビスも、医学図書館のレファレンスサービスの大きな特色といえる。SRのプロセスの一つとして欠かせない作業が「網羅的な関連文献の収集」であり、この点においてメディアセンターのスタッフの担う役割は大きい。SR実施時の代表的なガイドラインの一つであるCochrane Handbookでも、「Role of the information specialist/librarian」の中で、医療・ヘルスケア分野の図書館員がSRの実施において重要な役割を果たすことが言及されている¹³⁾。一方でメディアセンターがこのようなサポートを行っていることを知らない研究者も多い。国内の他大学では大々的にサービスを広報し、代行検索を通し研究者の論文執筆に貢献している機関もあり^{14) 15)}、メディアセンターにおいても広報の強化が課題である。

慶應の大学図書館員として信濃町キャンパスに配属され、これらのサービスを担当しない限り、このような貴重な経験を得る機会はないであろう。メディアセンターが関われる数少ない医療活動支援として、今後も「すべての人に健康と福祉を」届ける取り組みは続く。

注・参考文献

- 1) “KOMPAS：慶應義塾大学病院医療・健康情報サイト”。
<https://kompas.hosp.keio.ac.jp/>.
- 2) 健康情報ひろば事務局。“ボランティアさん募集”。
<https://libguides.lib.keio.ac.jp/hiroba/volunteer>
- 3) 門川俊明, 館田鶴子。慶應義塾大学病院「健康情報ひろば」開設とKOMPAS構築。医学図書館。2010, vol. 57, no. 4, p. 392-396.
- 4) 慶應義塾大学病院。“病院広報誌「すゝめ」”
<https://www.hosp.keio.ac.jp/about/special/disclosure/public/susume/>.
- 5) 診療で得られた患者さんの診療情報や試料が臨床研究で利用されることを、患者さんの求めにより拒否・停止すること。
- 6) 2016年4月より開始した、標準治療が困難な患者からの申出を起点として、未承認薬等を保険外併用療養として使用する制度。
- 7) 三谷三恵子, 赤堀美和子, 遠藤泉。患者図書館訪問 (3) 慶應義塾大学病院「健康情報ひろば」サービスの紹介。薬学図書館。2019, vol. 64, no. 1, p. 2-6.
- 8) “Minds診療ガイドライン作成マニュアル2020 ver.3.0”。公益財団法人医療機能評価機構。

https://minds.jcqh.or.jp/docs/various/manual_2020/ver3_0/pdf/all_manual_2020ver3_0.pdf.

- 9) 眞喜志まり。システムティック・レビューにおけるデータベース検索。情報の科学と技術。2017, vol. 67, no. 9, p. 472-478.
- 10) 江面美祐紀, 有野文香, 長島亮太郎, 本多貴実子, 前田知美, 藪野淳也。費用対効果評価制度該当製品の模擬分析前協議における論点の検討：慶應義塾大医療経済評価人材育成プログラム内授業において。レギュラトリーサイエンス学会誌。2022, vol. 12, no. 3, p. 277-287.
- 11) “今後の医薬品等の費用対効果評価の活用について（中医協 総-6 2.10.28）”。厚生労働省保険局。
<https://www.mhlw.go.jp/content/12404000/000688563.pdf>.
- 12) “Rayyan”。
<https://www.rayyan.ai/>.
- 13) Cochrane Information Retrieval Methods Group。“Cochrane Handbook for Systematic Reviews of Interventions Chapter 4: Searching for and selecting studies”。
<https://training.cochrane.org/handbook/current/chapter-04>.
- 14) 川村路代, 河野由香里。北海道大学附属図書館「文献検索相談・代行サービス」実践報告。医学図書館。2022, vol. 69, no. 3, p. 160-164.
- 15) 北海道大学附属図書館。文献検索相談・代行サービス【医系グループ】。
<https://www.lib.hokudai.ac.jp/med/search/>.